

平成22年度
入学試験問題

国 語

2月1日 午前

受験番号	氏 名

中村中学校

□ 次の(1)～(10)の——線のカタカナを漢字に直して答えなさい。

- (1) ねこのヒタイのようにせまい土地だ。
- (2) できるまでのカテイが大切だ。
- (3) 敵と味方をシキベツする。
- (4) 乗りこし料金をセイサンする。
- (5) オウフク切符きっぷを買って旅立つ。
- (6) テンケイ的な日本人の条件をそなえている。
- (7) ちょうのヒョウホンを集める。
- (8) 将来について親子でカタらう。
- (9) 宿題が早くスんだ。
- (10) 花見は桜にカギる。

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

* 字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

※
ダ・ヴィンチの生涯は、引越しの連続だった。ヴィンチ村で生まれ、フィレンツェで青春時代を送る。三〇歳でミラノに移るわけだが、ふつうなら、そのあたりで「身をかためる」時期である。結婚をしないにしても、落ち着く家を持ってもいい。

A ダ・ヴィンチは、そのあともマントヴァ、ヴェネチア、

ローマ、そしてフランスのアンボワーズと、転々とした。また再度、フィレンツェ、ミラノでも暮らした。落ち着かない人だなあ、と思う。

① ダ・ヴィンチは「この道ひとすじ」という生き方 タイ

プだったのか、絵を描いたり、死体を解剖したり、機械の設計をしたり、音楽をやったり、イベントの演出をしたり、ありとあらゆることをやった。しかも絵ひとつをとってみても、 a 完成のものが多

く、気まぐれで移り気だったことがうかがえる。日常の暮らしでも、そうだった。イタリアのあちこちに暮らした。それはたとえば日本

でいうと、札幌、仙台、東京、名古屋、京都、大阪、それに福岡で

暮らした。そして中国の北京あたりで人生の終焉をむかえた、みたいなのだ。忙しい。

※ その生涯を俯瞰すると、まずヴィンチ村、フィレンツェ、ミラノ

でそれぞれ十数年を過ごした。そしてミラノを離れたのが四七歳のとき。十数年というのは、それなりの長さではある。

B、ほ

くはいま四五歳で、群馬で生まれ、大学で東京に出て、それから今は伊豆のほうで暮らしている。何度も引越しをして、それなりに「あわただし」人生だとは感じる。しかしダ・ヴィンチは、そのあとマントヴァで一年、ヴェネチアで一年、再びフィレンツェとミラノで数年、 C ローマに行き、晩年をフランスのアンボワーズで過ごす。自分がこれからの後半生を、そんな移住の連続で過ごすとしたら、考えただけでまさに「ふー」とため息が出る。

② ダ・ヴィンチは、どうして、そんなに引越しを繰り返したのだろうか。それは本人の性格にもよる。先にも書いたが「この道ひとすじ」タイプではない。それが生き方にも反映している。しかし住んでいる町に飽きて、移り気だけで、それほど各地を転々としたわけではない。やはり「仕事」が関係していたのだ。ダ・ヴィンチは腕に職をもった男である。芸術家として技術者として、その他いろいろな顔をもちながら、その能力が発揮できる場を求めて動き回った。

たとえば、サッカーの中田英寿が、日本からイタリアへ、イングランドへと自分の能力だけで世界を渡り歩いているように、日産の社長カルロス・ゴーンが、ブラジル、フランス、日本と渡り歩いたように、ダ・ヴィンチは当時の交通事情、経済事情からはかなりの「広

域」といえる、イタリア各地から南フランスまで引越しを重ねた。

③ これはダ・ヴィンチの創造力に少なからず影響を与えていると、

ぼくは考えている。人は一つの世界を、一カ所で深め、掘り下げて

いく、ということもある。しかし各地を転々とすることで見えてく

ることもある。ぼくは以前、あるピアニストの人と対談をしたとき、

こんな話を聞いた。その人は、若い頃、天才ピアニストとして注目

されたが、その後、伸び悩み、苦しんだ時期があった。彼女（つま

り女性ピアニストだったのだが）は、ドイツに留学する機会を得た。

ドイツで学んだことは多かったが、それより重要なことは「住む場

所を変えた」ことであると彼女は話してくれた。買ひ物の仕方もち

がうし、生活のなにもかもがちがう。そうすることで、自分が弾く

ピアノの音もちがってくる。音が変わると、音楽も変わる。そうやっ

て行き詰まりを脱したのだという。

いまでこそイタリアは一つの国だが、ダ・ヴィンチの時代は、小

国が寄せ集まったような状態だった。都市により、文化も風習もち

がったことだろう。そのとき、新しい土地は、ダ・ヴィンチの目に、

どう映ったか。

君は「引越し」をしたことがあるだろうか。それまで暮らしてい

た家を出る。見慣れたあたりまえの壁、あたりまえのドア、あたり

まえの水道の蛇口、あたりまえの玄関の床。そういうものが、自分

の生活からサヨナラをしていく。引越しで家を出る最後のとき、そ

れまで暮らしていた家は、いままで一度も見たことのない輝きと

寂しさを放っている。家だけではない。住む町を変えるとき、その

町自体がまったくちがったものに見える。新しい町も、家も同じだ。

各地を移転したダ・ヴィンチは、そんな瞬間を何度も味わった

ことだろう。そして「生まれ変わった」暮らしの中で、何を見たか。

世界の輝きを感じたにちがいない。

ミラノは、北イタリア第一の都市だ。ぼくは、イタリアを南から

北へと旅して、ミラノに着いたことがある。列車でミラノ中央駅に

ついて、ホテルを決め、通りを歩いた。ふと、町を歩いている人の

服が妙に洒落ていることに気づいた。そのとき、ぼくは「ここは

都会なのだ！」と気づいた。日本から行くと、イタリアは、どこも

全部イタリアで、つまりヨーロッパ的に洗練されたあこがれの地、

みたいに見える。でも、イタリアにも田舎があり、都会があ

る。それは日本と同じだ。そして、ミラノは「都会」だった。ダ・

ヴィンチも、そんな体験をしたかもしれない。

※ そもそもダ・ヴィンチの生きたルネサンスの時代は、激動の時代

だった。それまで何百年も続いた、キリスト教中心の社会が、市民

社会や資本主義や「自由」な社会へと向けて、生まれ変わってい

た。さようなら、こんにちは、その繰り返しの時代だった。ダ・ヴィ

ンチは、自分が望むと望まないにかかわらず、そういう波に翻弄ほんろうされもした。自分のパトロンが政治的に失脚しっきやくし、逃げるように町を去ったこともある。ダ・ヴィンチの性格とは□^b関係⑥に、「安住の場」^⑦は初めからなかったのだ。

でもダ・ヴィンチは、サーファームみたいに、その波を乗り切り続けた。休むことのない暮らしは、その死のときまで続いたのだ。

(布施英利『君はレオナルド・ダ・ヴィンチを知っているか』)

※ダ・ヴィンチ……レオナルド・ダ・ヴィンチ。十五世紀から十六

世紀に活躍かつやくしたイタリアの芸術家。

※終焉……終わり。

※俯瞰……高いところから見下ろすように全体を見ること。

※ルネサンス……十四世紀から十六世紀にかけて、全ヨーロッパに

広がった芸術・文化の革新運動。またはその運動がおこった時代。

※パトロン……経済的な後援者。

問一 A C にあてはまる語を次からそれぞれ選び、記

号で答えなさい。

ア、または イ、ちなみに ウ、そして エ、でも

問二 線①の にあてはまる表現を次から一つ選び、

記号で答えなさい。

ア、とは正反対の イ、と同一の

ウ、には不十分な エ、を目的とする

問三 線 a 「完成」、b 「関係」について、それぞれの

□にふさわしい、打ち消しを表す漢字一字を答えなさい。

問四 線②とありますが、ダ・ヴィンチが引越しを繰り返した

理由を、ダ・ヴィンチの「性格」の点と「仕事」の点に分けて、それぞれ二十字以内で答えなさい。

問五 —— 線③について、

(一) 「これ」が指す内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、当時としてはかなりの「広域」を転々としてきたこと。

イ、生まれた国とは異なるフランスで晩年を過ごしたこと。

ウ、一つの世界を、一カ所で深め、掘り下げていったこと。

エ、芸術家や技術者など、いろいろな顔をもっていたこと。

(二) 「これ」が、ダ・ヴィンチの創造力に影響を与えた理由を、

筆者はどのように考えていますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、親しい人のいない土地で自分を追い詰めることで、芸術の行き詰まりを解消することができたから。

イ、複数の異なる種類の活動から得た知識や経験を、自分の芸術に反映させることができたから。

ウ、優れた美的感覚を持つ人がいる都会で長く暮らすことで、自分の美的感覚をみがくことができたから。

エ、町や家があったくちがったものに見えるという瞬間を何度も経験し、世界の輝きを感じたから。

問六 —— 線④の主語を答えなさい。

問七 —— 線⑤について、AさんとBさんが次のように話し合いました。空らんにあてはまる表現を、字数指定にしたがって本文中からぬき出しなさい。

本文中からぬき出しなさい。

Aくん「筆者が気づいたように、ダ・ヴィンチの時代のイタリア

アだって、日本と同じように I (十一字) という状況だったからだろうね。」

Bさん「そうね。そして、きっとダ・ヴィンチは筆者以上の体験をしたと思うわ。当時のイタリアは、地域によっ

て II (十字) でしょうからね。」

Aくん「それは、筆者も述べているように、ダ・ヴィンチの時代のイタリアは小国が寄せ集まったような状態だったからだろう。」

Bさん「そのとおりね。」

問八——線⑥とありますが、なぜですか。四十字以内で説明しなさい。

〔三〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

*字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

問九——線⑦に使われている表現技法を次から一つ選び、記号

で答えなさい。

ア、反復 イ、省略 ウ、比喩 エ、対句

ケンタくんの家はお菓子屋^{かし}さんを営んでいます。ケンタくんは、小学校に入ってからずっと友だちができず、勉強もできません。それでもケンタくんは自分にできることをみつけようと、家の仕事のお手伝いをするようになります。

小学三年生になって、ケンタくんは店にあったお菓子の景品の本を読む楽しみを覚えました。その結果が、四年生になってから現れることになりました。

国語の時間です。新しい章に進むたびに、先生はそこに新しく出てくる漢字を黒板に書きました。授業ではまだ習っていないのですが、先生は試しに、「この字が読める人」と、クラスみんなに聞くのです。クラスの中には、予習をして来る子もいっぱいいるので、「はい！」^aと手を挙げる子が大勢^bいました。ケンタくんも読めたので、小さな声で、「はい」と、小さく手を挙げました。

先生は、元気よく手を挙げた子を指して、その子がわかると、「それじゃ、これは」と、そのまた次の章に出てくるような、まだ習っていない漢字を書くのです。そういうことが、読める子が一人もいなくなるまで続きました。

はじめのうちは、みんな元気よく手を挙げているのですが、その

うち、先生の書く漢字がむずかしくなるので、手を挙げる子が少なくなってきました。そして気がつくのと、一番最後まで手を挙げていられる子は、ケンタクくんなのです。

① 最初の時は、ケンタクくんも「まぐれだ」と思いました。でも、そういう授業が何回か続くと、いつも最後まで手を挙げて、難しい漢字をよく読めるのは、ケンタクくんになってしまいます。もちろん、

② ケンタクくんは恥はずかしくて、手を挙げるのもそつとで、「はい」と言うのも、とても小さな声です。「みんながわからないのに、自分一人だけが手を挙げているのはへんかな……」と思って手を挙げる

と、手の挙げ方も小さくなるし、声も小さくなるのです。ケンタクくんがそう思うのも、しかたがありません。学校に来てケンタクくんが声を出すのは、出席を取る時以外は、その時だけなのです。

でも、そういうことが何回か続くと、むずかしい漢字を書く先生は、ケンタクくんの方を見て書くようになります。「じゃ、これはわかる、ケンタクくん？」と、ケンタクくんに向いて質問をします。学校に来て、

③ 自分の名前をそんなふうにして呼んでもらえるのは、はじめてのことなのです。

ケンタクくんは、自分になにが起こっているのか、よくわかりませんでした。一度だけ先生に、「どうしてそんなに漢字が読めるの？」と、みんなのいる前で聞かれたことがあります。でも、ケンタクくんは、

なにも答えられませんでした。ケンタクくんが読んでいるのは、マンガののっている少年雑誌と、お菓子の景品の本だけで、ほかに勉強に役に立つような本は、なにも読んでいません。お菓子の景品の本を読んで、「自分は本が好きなんだ」と思って、学校の図書室へ行っただこともありますが、そこにある本は、どういうわけか、ちゃんと読めないのです。

ケンタクくんは、まさか、ふりがなつきのマンガとお菓子の景品の本を読んでいると、いつの間にか漢字もたくさんさん読めるようになるとは思わなかったもので、「わかりません」としか言えなかったのです。家に帰ったケンタクくんは、お母さんに言いました。

「今日、先生にどうしてそんなに漢字が読めるのって、ほめられたよ」とすると、お母さんは言いました。

⑤ 「読めるだけで、書けなかったらどうしようもないだろう」ケンタクくんは、「うん」と言うしかありません。そして、ケンタクくんが「うん」と言うと、お母さんはすぐに白い紙を取り出して、「じゃ、書き取りだ。今日、学校で習った字を書いてごらん」と言うのです。

お母さんは、ケンタクくんのランドセルから国語の教科書を取り出して、新しい漢字を読みます。でもケンタクくんの欠点は、漢字を読めても、書くのが苦手なことで、すぐにお母さんから、「だめじゃ

ないか！」と言われて、それっきりなのです。

そんなケンタクくんが、四年生の二学期を迎え^{むか}ました。その日は学級委員の選挙があつて、ケンタクくんはおとなしく、勉強のできる子の名前を投票用紙に書いていました。

学級委員が決まった後で、^Bいろいろな委員の選挙があつて、図書委員の選挙もありました。選挙の時にケンタクくんが苦手だと思つるのは、クラスの友だちの名前や性格をよく知らないから、^{だれ}誰を何委員にすればいいのかわからなくなってしまふことです。運動の得意な「松原くん」を図書委員に選んでもしかたがないはずですが、クラスに^Cあいかわらず一人の友だちもないケンタクくんは、誰の名前を書けばいいのかが、^D時々わからなくなるのです。

投票を終えたケンタクくんは、^{だま}黙って黒板を見ていました。人気のある子の名前がそこに書かれると、みんなの中から^{かんせい}喚声が上がります。65
「あんなふうに人気のある子になれたらいいなア」と、ケンタクくんが思っていた時です。黒板を見ていたケンタクくんの顔が、真っ赤になりました。そこには、自分の名前が書かれているのです。

そういう選挙の時に、自分の名前が黒板に書かれたことなど、ケンタクくんは一度もありません。そんなことが起こることも思つたこと^Cはありません。でも、二学期の図書委員の候補に、ケンタクくんの名

前が一票だけ入つたのです。ケンタクくんは真っ赤になつたまま、黒板の方を見られなくなりました。

もちろん、誰もそんなケンタクくんのことを気にしません。一票しか入らなかつたケンタクくんが、^⑥図書委員になれるはずもありません。ケンタクくんは、「うれしい」とも思えずに、ドキドキしたまま、学校から帰りました。

家に帰ると、お母さんは^dレース編みをしていました。ケンタクくんは、お母さんに言いました。

「お母さん、今日ね、学校で図書委員の選挙があつてね、それでね、ぼくにも一票だけ入つたんだよ」
言うだけで、ケンタクくんはドキドキです。

お母さんは、レース編みの針を動かしながら言いました。
「それで、図書委員になれたのかい？」
ケンタクくんは答えました。

「ううん」
お母さんはレース編みに一生懸命で、ケンタクくんのこととはどうでもいいみたいでしたが、針を動かしながら言いました。

「なれなかつたら、どうしようもないじゃないか」
ケンタクくんは、「うん」と言つて、また真っ赤になりそうでした。

「お母さんに怒られそうだ」と思ったからではなくて、黒板に自分の名前が書かれたことを思い出したからです。

お母さんは、また言いました。

⑦「なれるように、頑張^{がんば}らなきゃだめだろう」

お母さんの目はレース編みの方を見ていて、ケンタクくんの方を見ていません。ケンタクくんもまた、お母さんの方を見ていませんでした。

⑧ケンタクくんは「うん」と言って、お母さんのそばを離^{はな}れました。

もう、お母さんの言う通りにしようとは思いませんでした。ケンタクくんはべつに、図書委員になりたかったのではないのです。お母さんにそのことを報告したのは、「学校にも、ぼくのことを認めてくれる人がいるんだよ」ということを、言いたかっただけなのです。

ケンタクくんは、自分のクラスに、自分の名前を知っていてくれる友だちが一人でもいるんだとは思いませんでした。でも、自分の名前を知っていてくれる友だちが、一人はいるんだと思いました。そのことだけがうれしくて、図書委員になることなんか、どうでもよかったです。

でも、お母さんは、そういうことをわかってくれません。だからケンタクくんは、「うん」とだけ言って、お母さんのそばを離れたのです。

お母さんのそばを離れて、一人になって、ケンタクくんはまた、うれしくてドキドキして、真っ赤になりました。「学校に行っててよかっ

110

95

た」とケンタクくんが思ったのは、その四年生の二学期の最初が、はじめてのことでした。

学校へ行っても口のきけなかったケンタクくんは、そうして少しずつ変わり始めるのです。

(橋本治『勉強ができなくても恥ずかしくない』)

115

問一 〓 線 a 「挙(げる)」、b 「大勢」、c 「候補」、d 「編

(み)」の読みをひらがなで答えなさい。

問三 〓 線②とありますが、ケンタクくんはどうしてこのように

なってしまうのですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

問二 〓 線①とありますが、どんなことが「まぐれだ」と思っ

たのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、先生が最後まで自分を指してくれたこと。

イ、元気に手を挙げ続けることができたこと。

ウ、漢字が読める生徒がクラスにいなかったこと。

エ、クラスで一番よく漢字が読めたこと。

ア、普段から小さい声で話す自分が、授業中だけ積極的に返

事をしてしまうのは目立つようできまりが悪いから。

イ、普段は全然話さない自分が、みんなが答えられないとこ

ろでかえって答えてしまうのはおかしなことのように思

うから。

ウ、普段はみんなに遠慮えんりょしてしまう自分が、国語の授業だけ

遠慮せずにふるまっているのが失礼に思えたから。

エ、普段はみんなに意見を合わせている自分が、自分の考え

を主張するときらわれるのではないかと心配したから。

問四 ——— 線③とありますが、どんなふうに呼んでももらえること

を言っているのですか。最も適当なものを次から選**び**、記号で答えなさい。

ア、能力が認められて、期待をこめて呼んでももらえること。

イ、努力がむくわれて、ごほうびとして呼んでももらえること。

ウ、勇気に対して、いたわりの気持ちで呼んでももらえること。

エ、一人前とみなされて、尊敬をこめて呼んでももらえること。

問五 ——— 線④とありますが、どうしてケンタクくんは答えられな

かったのですか。六十字以内で説明しなさい。

問六 ~~~~~ 線AとDのうち、働きが他と異なるものを一つ選**び**、

記号で答えなさい。

問七 ——— 線⑤とありますが、このときのケンタクくんの気持ちを

説明したものとして次から適**当**でないものを一つ選**び**、記号で答えなさい。

ア、漢字が読めることを学校でほめられただけで胸がいっぱいで、

書き取りができるかどうかまでは思いもよらなかったから。

イ、お母さんに書き取りのテストをうながされて、自分でも

お菓子の景品の本の効果を、書き取りでも確認したほう
がいいと納**得**したから。

ウ、漢字が書けないのも、書けないままでは仕方がないとい

うのも全くお母さんの言うとおりで、自分でもそう思う
しかなかったから。

エ、勉強らしい本も読まず、図書館の本も読めない自分には、

勉強に役に立つことを求めているお母さんに答える言葉
がなかったから。

問八 ―― 線⑥とありますが、このときのケンタクさんの気持ちを

説明したものとして最も適当なものを次から選び、記号で答

えなさい。

ア、図書委員になれなかったことが残念だったし、たった一

票だけ入ったことであって自分が目立つようで、落ち

着かない気持ちだった。

イ、自分にも人気があるのかもしれないとぬぼれそうだが、

そんな気持ちのゆるみがあってはならない、と自分を恥

じる気持ちだった。

ウ、図書委員になれるはずもないのだから「うれしい」気持

ちとは違うみたいだが、自分に一票入ったことで、ただ

気持ちが高ぶるばかりだった。

エ、自分に一票入ったことに強く動揺どうようしているのに、クラス

のみんながそんな自分に気づいてくれることもなく、何

か満たされない思いだった。

問九 ―― 線⑦とありますが、ケンタクさんに一票入ったことにつ

いて、お母さんとケンタクさんでは、考えがちがっているよう

です。そのちがいを次のように説明しました。空らんにあて

はまる表現を、字数指定にしたがって本文中からぬき出しな

さい。

お母さんは Ⅰ (七字) という結果だけに興味があって、

結果を出せなかったケンタクさんに興味がないようである。一方

でケンタクさんも Ⅱ (十六字) ということだけがうれしくて、

そのことがお母さんには伝わらないこともわかっていた。

問十 ―― 線⑧とありますが、このことはどういうことを表して

いますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、ケンタくんが、お母さんに認められなくても自分の力で

図書委員になろうと決意を固めたこと。

イ、ケンタくんが、自分のことを理解してくれないお母さんに失望してしまったこと。

ウ、お母さんに反発してみせることで、大人への第一歩をケンタくんが歩みだしたこと。

エ、ケンタくんが、自分自身を認める方法を、お母さんとは違った形で見つけたこと。